

オムツ・甘やかし・排泄介助・仮性包茎・お漏らし・哺乳瓶・
溺愛・失禁・脅迫・トイレトレーニング・スカトロ

尊すぎる天使 サンプル

1

クーラーが効きすぎていて、寒い。

おもしろいとうま
面来斗真はぶるつと体を震わせながら伝票に視線を
落とした。

(ここつてたしか、先月から担当者が……)

ファイルを取ってこよう、と腰を浮かせた時、隣から
罵声が飛んできた。

「おいトンマ！ まだ請求書できねえのか！」

「あつ……」

「何してんだよ！ さっさとやれよ！」

「すっ、すみませんっ」

怒鳴られると一切の思考が止まってしまふ。今、何の
仕事について言われた？ 自分は何と返さなければい
けない？

じんわりと股間が熱くなった。尿が漏れ、すでにたっ
ぷりと水分を含んだオムツをさらに大きく膨らませる。
やらなければならないことが多すぎて、どれから手
を付けたらいいかわからない。

斗真は顔のほてりを感じながら、机に重ねられたファイルの束を手を取った。

煮え切らない態度の斗真に苛立ちが増さったのか、先輩が窓際に向かってずかずかと進む。

「課長！ 何でこんなやつ雇ったんですか！」

「そんなこと僕に訊かれても……」

課長の方が立場は上だけれど、社長の甥っ子である先輩には何も言えずに気まずそうに視線を逸らす。しかし課長は斗真と目が合った瞬間、苛立たしげに顔を歪めた。

（ごめんなさい……）

自分さえいなければ課長が文句を言われることも、先輩が苛立つこともなかった。

斗真だって何度も退職を考えた。けれど中卒で両親もおらず、排泄だって自分で管理できないようなやつを雇ってくれるところが他にあるとは思えなかった。

「おいトンマ、早くしろ！」

「はいっ、すぐっ！」

（先輩はたしか、えっと……）

請求書だ。ファイルを開き、震える手で送付先一覧を確認する。

「おいまだか！」

「はいっ、すみませんっ！」

でも、これは本当なら先輩の業務だった。今では当たり前のように斗真がやることになってしまっているけれど。

先輩が部屋を出ていくのを背中に感じながらマウスを操作する。印刷された送付状が複合機から吐き出される頃には、いくらか動悸は治まっていた。

斗真が入社して五年。隣の席はずっと変わらず先輩だった。そして毎日怒鳴られ、舌打ちをされるの繰り返し。斗真を庇う人もいない。しかし斗真が愚鈍であることは事実だし、仕事は辞められないのだから耐えるほかない。

定時ちやうどに先輩が帰ったのを皮切りに、続々と社員が減っていく。

誰もいなくなったフロアで一人、キーボードを叩く。みんなが退社した後が平和な時間だ。

けれど今日は早く帰りたい。近所のドラッグストアの特売デーなのだ。そろそろオムツを買わなければ残り少ない。

（早くオムツ替えたい……）

パンパンで気持ち悪い。それに股間を洗って清めた。ムレてしまつて痒みがひどい。

膝をすり寄せて不快感をごまかしながら仕事を進める。明日発送予定のパンフレットの用意と、足りない備品の発注確認。それらを終えたところでパソコンの電源を落とし、斗真はビニール傘を片手に暗い家路にいった。

* * *

梅雨入り前の六月初旬。

大学生アルバイトの藤田が入岡いりおかの隣にしゃがみこみ、
小声で言った。

「店长、来てますよ、あの子」

「うん」

言われなくても知っている。

入岡は補充していた生理用品の箱から顔を上げると、
数メートル離れた先にいる、くたびれたスーツ姿の男
の子に視線を向けた。

体は薄く、まだできあがっていないことがわかる。二
十歳かそれより下か——制服ではなくスーツだから高
校生ではないだろう。癖毛なのか、黒い毛先はあちこち
に跳ねている。しかしそれが野暮ったく見えないのは
白い肌とシャープな顎、カラコンを入れたような大き
な黒い瞳がファッション感を出しているからだろう。
おそらく本人に自覚はないが。

彼を知ったのは、入岡がこの店に異動してきた翌日
だった。今からもう二年も前のことだ。彼が買うのは大
人用のオムツ。たまにトイレットペーパーやティッ
シュを買うこともあるが、来るのは毎回特売の日だけ。
だから入岡は、特売デーになると我慢できずしょっ
ちゆう店内を見回してしまう。

「ヤングケアラーってやつですかね」

「うーん……」

その言葉は入岡も知っていた。けれど単に買い物担
当としておつかいに来ているだけかもしれない。もし

介護に困っているようなら手を差し伸べたいが、ただのドラッグストアの店員である我々が不用意に声を掛けるのはいかななものか——という説明を藤田にする。しかしそれは建前だった。入岡にはオムツを使っているのが誰なのかわかってる。だってもう二年も彼を視線で追っている。

「俺、年近そうだし声を掛けてきましようか」

「いや、いいよ。俺が行く」

貴重な機会を藤田になんてやるものか。

人がいると話しづらいかもしれないから他のところに行っていてと言いついてから、入岡はオムツコーナーの前に立ちすくんでいる男の子に向かって歩を進めた。

緊張する。けれど声をかけるきっかけをくれた藤田には感謝だ。先日新聞の勧誘でもらった映画の割引券でもくれてやるか——いやどうせ一緒に行く相手はいないだろうからやめた。

「いらつしやいませ」

「あつ……」

男の子が半歩下がった。これが初来店で、もっとやんちやなタイプだったら万引きを疑ったかもしれない。

「何かお悩みですか。サイズかな」

普段から気にしていたことがバレないよう、さりげないふうを装う。

「あ……いえ、その……」

男の子は視線を泳がせながらも、いつも買っている

メーカーの、いつも買っているサイズのオムツに視線を向けた。

(値段か……)

三日前に値上げがあったのだ。百円程度だが、きっとこの子には大きい違いなのだろう。

それにしても体が細い。栄養状態が悪いのは明らかで、靴や靴を見ても全体が貧相だった。

「……もし介護をしているなら、条件次第では医療費控除の適用になりますよ」

「えっ……あ……」

入岡はいつもの癖で男の子の股間に視線を向けた。不自然に膨らんだズボン。やはり使っているのはこの子本人なのだ。しかし、初対面でそれを言うわけにはいかない。

「……クーポン持ってます？」

「え？」

「クーポン。紙のやつ」

店で配ったのは先週だけだった。彼は来ていなかったが、新聞の折込チラシにも印刷されている。

「いえ……何も」

初めて聞いた「お願いします」「ありがとうございます」以外の言葉。礼儀正しいこの子は、レジに商品を置く時には「お願いします」、会計が終わった時には「ありがとうございます」と挨拶をするのだ。最近の子にしては珍しい、と入岡はそういうところにも好感を抱いていた。

そして今、あまりのかわいさにもっと声を聞きたいという欲が膨れ上がっている。あと、もう少し近くからオムツで膨らんだお尻のラインを見たい。

「これ」制服のポケットから紙きれを取り出す。「レジで出せば二十パーセントオフになるから。使えるの、今日までだけ」

「え……でも僕——」

男の子は両手を胸の前で振った。そんなかわいらしい仕草をして、男がどう思うか考えたことはないのだろうか。職場でセクハラをされていないか心配になる。

「使って」

「……いいんですか？」

男の子にっこりと笑いかけながら唇の前で人差し指を立てる。

「内緒ね」

「あ……ありがとうございます」

男の子の頬に赤みがさした。笑顔には戸惑いが含まれていたが、そんな初心な反応も口内に唾液が溜まるほど愛らしい。

もう少し近くで顔を見ていたかった。声だって聞いていたかった。しかし男の子はぺこりと小さな頭を下げると、オムツのバックを手に取り足早にレジに向かって歩いていった。

(めっちゃくちゃかわいい……)

後ろから見る膨らんだお尻も、舌舐めずりしたくなるほど魅力的だった。服をすべて脱がせ、股間を蒸し夕

オルで拭いて新しいオムツをあててやりたい。でもそのときは彼が普段使っているパンツタイプではなくテープタイプがいい。一択。

入岡は、若い頃からエイジプレイが趣味だった。

年下のかわいい男の子を赤ん坊として愛したい。哺乳瓶でミルクをやり、おしゃぶりを咥えさせ、オムツを替えて風呂に入れる。さすがにミルクだけで生活させるわけにはいかないのもちろん食事も取らせるが、それだつて入岡自身の手でスプーンを口に運び、一口ずつ飲み込んだのを確認しながら食べさせてやりたいと思っていた。寝る時はもちろん一緒。ベッドで絵本を読み、眠りに落ちそうになれば怖い夢を見ないように抱きしめてやる。そしてその無防備な寝顔を見ながら常夜灯のついた部屋で一人、ペニスをいじって快感を貪る――。

「店長、どうでした？」

「え？」

至福の妄想タイムを邪魔しやがって、と内心で藤田に鞭を打つ。

「えっ、て……だから、ヤングケアラーでした？ 相談窓口とか教えてあげたんですか」

「あ……」

どうしよう。何と言おうか。あの子自身が使っているとは言えないし――。

「驚かせちゃったみたいで、あまり話せなかったよ。けどたぶん、大丈夫だと思う」

藤田はすっきりしない表情を浮かべたが、上げた片眉を下ろすとバックヤードに歩いていった。

2

「がゆい〜！」

赤くなつた股間が痒くてたまらない。長時間つけばなしのオムツにこの湿度と気温。水で濡らしたタオルで股間を包むが、痒みは一向に治まらない。

（薬買えばよかった……）

けれどオムツかぶれの薬がどこにあるのかわからなかったのだ。もしあつても、買うかどうかは値段次第だったけれど。

（あの優しい店員さんに訊けばよかったかな……）

でもそんなことをしたら自分が使っているとバレてしまったかもしれない。いや、介護の話をされたからきつと誰かのお世話をしていると勘違いしてくれているはず。でもそれでオムツかぶれの薬なんて言ったら、ちゃんと世話してあげていないのか、なんて――。

ただたまに行くお店の店員と客。特別な関係でもないでもないというのに、だめなやつだと思われるのが怖かった。

（それにしてもすごく優しい人だったな）

まさかクーポン券をもらえるなんて思っていないかった。驚いたけれど、正直とても助かった。値上げは痛かったけれど、ただの特売よりも安く買うことができ

た。

（あのクーポン、どこでもらえるんだろう……）

訊けばよかった。貧乏丸出しで恥ずかしいけれど、毎日の生活はギリギリだ。削れるところは削らないと立ち行かない。

本当はオムツを使わずに済むのが一番いい。そうすれば月に五千円は浮くだろう。けれど、いったいどうしたらオムツを使わずに過ごせるだろうか……。

オムツを使うようになったきっかけは、先輩にトイレに行くことを許されず、社内で漏らしてしまったことだった。先輩には椅子を蹴られ、みんなには鼻をつまみながら睨まれた。

その時は本当に恥ずかしくて消えてしまったかったけれど、それでも辞めることはできず、もう二度とこんなことがないようにとオムツを使っていたら、いつの間にかオムツに排尿することを脳が覚え、トイレに間に合わない体になり、次第に自分の意思とは関係なく漏れるようになってしまった。

けれど、オムツを使えるのは一日に二枚が限度だった。朝家を出る前と、夜はシャワーを浴びた後に替える。そうするとだいたい十二時間ごとに交換になるのだ。それ以上替えると破産する。

「はあ……かゆいっ……」

耐え難い股間の痒み。ぬるくなつたタオルを洗面器の水で濡らし直し、面を変えて押し当てる。でもそれでは足りず、あまりこすらないように意識しながらぐっ

ぐっとタオルを強く押し付ける。

「痒いっ……」

全然マシにならない。やっぱり薬を買いに行こうか。でもきつと高い。あのクーポン券がもう一枚あれば……お願ひしたら、あの人はもう一枚くれたりしないだろうか。

——だめだめと首を振る。あの一枚をもらえただけでもありがたい。それにそんなことをしたらまるで物乞いみたいだ。凶々しいやつだとも思われたくない。

（大丈夫……）

明日になれば、一晚寝ればきつと少しは良くなっている。

（大丈夫……）

斗真は痒みに耐えながらオムツをはき、タオルを片付けて眠りについた。

「おいトンマ、請求書」

「もう発送しました」

昨日は久しぶりに仕事の夢を見なかった。かといって特段楽しい夢を見たわけでもないけれど、目が覚めた時に自分が泣いていないというのはいいものだなと思ひながら、一日の始まりを切ることができた。

「チツ」

先輩が舌打ちをして部屋を出て行く。タバコを吸いに行ったのだろう。斗真よりもいい給料をもらっているのだろうか、先輩がここにいるのは斗真に罵声

を浴びせることと、タバコを吸いに行くことだけだった。

(今のうちに進めちゃおう)

怒鳴られる度に頭の中が真っ白になり、効率が落ちる。だから先輩が私服に行っている間が仕事を進めるチャンスだった。

メールを確認し、顧客や取引先から希望された書類の発送準備をする。送付状を印刷していると、斗真の机の隣に課長が立った。渋い顔をしている。

「あのさ」

「あ……はい」

怖い。いったい何を言われるのだろう。

「ちよつと臭うんだよね」

「え……？」

シャツは毎日浴びている。スーツは二着しか持っていないけれど消臭スプレーを使っているし、肌着やシャツはちゃんと毎日洗っている。

「これ」

差し出されたのは四角い箱に入った消臭ビーズだった。すでに開封され、置くだけになっている。

突然のことに言葉を出せずにいると、課長の視線がちらりと斗真の股間に向いた。

(あ……)

意味に気付き、カアツと頬が熱くなった。尿の臭いがある、ということだ。

「机の下にでも置いておいて」

そう言うと課長は踵を返し、自席を通り過ぎて大きく窓を開け放った。

みんなの視線を感じて逃げるように下を向く。恥ずかしい。申し訳ない。帰りたい。転職したい。けれど雇ってくれるような会社は他にない。

消臭ビーズは太ももで挟むことにした。これなら机の下に置くよりも効果的だろう。

(今日だけはごめんなさい……)

これからは替えるタイミングをずらすことにしよう。昼休みに一度替えて、その後は朝までそれで過ごす。そうすれば一日に二枚ということは変わらない。でも漏れてしまうのは怖いので、水分はなるべく摂らないようにする。

(うん、そうしよう……)

五分ほどすると先輩が戻ってきた。不自然な体勢になっている斗真に気付いたようだったが、消臭ビーズや臭いについて言及されることも、なぜか仕事の進捗についても尋ねられることはなかった。

昨夜も仕事の夢を見なかったから、今日もきつと大丈夫。そう思って眠りについたのに、翌朝の目覚めは最悪だった。

嫌な夢を見た。職場の全員から消臭ビーズを渡される夢だ。課長からだけでなく先輩や、斗真より後に入ってきた人もみんなが鼻に洗濯バサミをつけて、変な声で「これ使って」と言いながら順番に斗真の机に消臭

ビーズを置いていく夢。

それだけですでに気分は最悪だったのに、目が覚めたら布団がびしょびしょになっていた。オムツはこれ以上ない程膨らみ、給水量の限界を訴えていた。

「……休みでよかった……」

重い体を起こし、ユニットバスの浴槽でシーツを洗う。外は雨なので、敷布団は壁に立てかけておくしかないだろう。

（やっぱり寝る前に一度替えなきゃだめか……）

昨日からさっそくオムツを替える時間を変更したのだが、やはり夜の時間帯が長すぎたようだ。水分も控えめにしようと思っていたけれど、暑さに負けて飲んでしまった。

（でも一日に三枚は厳しいし……）

今は三十枚入りを月に二パック。日に三枚使うとなると、もう一つ買わなくてはならなくなってしまう。でもこのまま布団を汚し続けるわけにはいかないし、職場で尿の臭いを発し続けるわけにもいかない。

（あ……）

思い出してハッとした。突然のことで消臭ビーズを渡された時はただ俯くことしかできなかったけれど、あのときズボンが濡れていなかったことは課長にもわかっていたはずだ。なのに尿の臭い——オムツをしていることに気付かれていたのだ。

（最悪……）

いや、どうせ以前漏らしたことはみんな知っている

のだ。その後に入社してきた人になって、誰かに笑いのネタにされて知られてしまった。

面来斗真おもむいとまをもじって「お漏らしトンマ」。それが斗真のあだ名だった。

「どうにか切り詰めよう……」

祖父母への仕送りも減らすわけにはいかない。

両親は斗真が小学生の頃に二人いっぺんに事故で亡くなった。それから父方の祖父母の家に引き取られたけれど、二人とも年金暮らしでも高校なんて通えるような金はなく……かといって田舎の山奥では車の免許を持たない中卒が働ける場所はなく、こうして一人街に出てきたのだ。

しかし残業代も出ないので、家賃や公共料金を支払えば手元に残るのはほんのわずか。そこから食費と日用品、そしてオムツと祖父母への仕送り。貯金なんて月に数百円でできればいい方だった。

「はあ……」

アルバイトを始めようか。でも雇ってもらえるだろうか。

(あのドラッグストアだったら……)

あの優しい男の人がいる職場だったら、怒られたり笑われたり蹴られたりせずに働けるのだろうか。いつ怒鳴られるのかとビクビクせずに過ごすことができるのだろうか。トイレに自由に行かせてもらえるのだろうか。

雇ってもらえるはずがないとわかりながら、気に

なってしまった。外を見ると、雨雲に覆われて午前中とは思えないほど暗くなっている。どうやら雨も降っているようだ。この後は雨脚がきつくなるかもしれない。それなら、と今のうちに買い物に出ることにした。

ドラッグストアはスーパーの隣にある。アパート寄りにあるスーパーを一度通り過ぎ、ドラッグストアのドア横で足を止める。

(パート従業員募集……)

要普通免許の文字はない。しかし「高卒以上」と書かれていた。

(やっぱりだめか……)

残念だけれど仕方ない。

踵を返し、スーパーに入る。雨降りの土曜日の午前中だからか、客はそれほど多くはなかった。

最初に向かうのは見切り品のコーナー。昨夜売れ残ったらしい野菜がいくつかあったので、調理しやすい人参と玉ねぎをかごに入れる。それから外国産のとり肉をひとパック。二十パーセントオフのシールが貼られた牛乳を二本。本当は甘いものも欲しかったけれど、これからはオムツ代がさらに増えることを考えて諦めた。

会計は五百二十円。ワンコインでは足りなかったが仕方ない。

(いつまでこの生活が続くんだろう……)

斗真は中学生の頃から履いているスニーカーを雨で濡らしながら、薄暗い道を歩いた。

* * *

制汗剤を季節もののコーナーに移動させていた藤田が、ふとその手を止めた。

「あ、店長。そういえば昨日来てましたよ。あの子」

「え？」

「ほら、あの子ですよ、オムツの」

わかってる、と言いつつそうなる口を慌てて閉じて一
拍置く。

「……ああ、あの子。いつ？」

藤田と特定の客の話など、あの子以外にしたことはない。それに入岡の頭の中にはいつだってあの男の子が住んでいるのだから、わざわざ「オムツの」などと説明されなくても浮かぶのはただ一人だ——とはもちろん言えない。

「朝ですよ。開店して間もなくかな。店には入ってきませんでしたけど」

「なんで気付いたの？」

もしかしてこいつもあの子を狙っているのか、とつ
い眉根を寄せてしまう。

「いや、なんか求人チラシを見てたみたいだから興味あるのかなと思って。首を振っていなくなっただんで、たぶん条件が合わなかったんだと思いますけどね」

「条件……？」

もし入ってくれるのなら嬉しい。ずっと一緒にいら

れるし、うまくすれば休憩時間にオムツを替えてやることだってできるかもしれない。その刺激でペニス勃勃起してしまうようなら、声を出さないことを約束に――。

「まあ……時給、安いですからね」

藤田がとげとげしい目で入岡を見た。妄想を邪魔され、入岡にはどうしようもない時給のことで文句を言われ――止まっていた手を動かしながら言い返す。

「それは俺に言われても。本部に掛け合ってください」

「いやそこを掛け合うのが店長の役目でしょう。うちの子達はめっちゃくちゃ一生懸命頑張ってくれてるんでもう少し！　って」

仕事中にこれだけしゃべっててよく言うよ。そう軽口を返しながらも、頭の中はオムツのあの子でいっぱいだった。

面接に来てくれないだろうか。そうしたら名前や住所、電話番号だつて知ることができる。それらを勝手に覚えるようなことはできないが、「近所だね」なんて話さえしてしまえばこっちのものだ。

もし勤務時間の条件が合わないのなら、そこは店長権限でどうにかしよう。給与面を言われると苦しいが、そこはクーポン券を渡したり社割でどうにか――

「――聞いてますか？」

「え？」

「だから、もしかしたら折込チラシが貼ってあるって思ったのかもって」

「何の話？」

「本当、マジで話聞いてました？」

「いや、仕事に集中してた」

藤田が半眼で入岡を睨む。

「めちゃくちゃ手止まってましたけどね」

「レイアウトの変更が必要かなって考えてたんだよ」

「さつき直したばかりじゃないですか」

そうだ、求人チラシに「アットホームな職場です」って書き添えてみようか。「面接に来てくれれば、「パパって呼んでもいいんだよ」なんて言って、そこからエイジブレイが始まったりして――

「店長！」

「え？」

「だから、クーポンが欲しかったのかもって」

「クーポン？」

首を傾げた入岡に、藤田が遠慮のないため息を吐く。
店内でそれはだめ。

「だから、もしかしたら求人じゃなくて折込チラシが貼ってあるって勘違いしたんじゃないかなって。クーポンが欲しくて」

「なんでクーポン？」

もしかして、こっそり渡したのを見られていたのだろうか。心臓はこれ以上ないほどバクバクしていたが、しれっと視線を棚に移す。

「だってこないだ突っ立ってたのって、値上げの直後だったじゃないですか。いつもだったら悩まずに商品

取ってレジに向かうのに、こないだは少し戸惑ってたみたいだったから」

「ああ、そういう……」

よく見てるな。まさか本当にあの子を狙っているんじゃないかな。胸の中にどろどろした黒いものが広がっていく。

「だから残念そうだったのかなあ……給料がどちゃくそ低いことじゃなくて」

「……そうかもね」

なんだ、入職希望じゃなかったのか。がつくりと肩が落ちる。もう藤田の嫌味も気にならない。低い時給で馬車馬のごとく働けばいい。

「……犯罪だと思えますよ」

「え？」

「さすがに三十六歳が十代に手を出すのはちよつと」

「いや、藤田くん？ 何言ってるの？ どういうこと？」

慌てて商品を掴んだせいで、スプレーが高い音を立てて床を転がった。手のひらの汗をエプロンで拭いてからそれを拾う。

「別に男同士っていうのは気にしないでですけど、さすがに年齢差がちよつとねエ……」

「いやいやいやいや？ よくわかんないんだけど」

血圧が上がりすぎて卒倒しそうだ。このままここにいてはいけない、と脳が警鐘を鳴らしている。

「まあ、今度見かけたら俺も声を掛けてみますよ。入職

してくれたいらいいですね」

「えっ——え、ちよ、」

藤田は一方的にそう言うと、入岡に背を向けて歩き出した。伸ばした手が空を切る。

「ちよ、藤田くん?!」

「休憩、お先いただきますー」

行き場を見つけることができなかった右腕を下ろす。心臓がさつきよりも激しく動いている。

(マジかよ……)

そんなにわかりやすい態度を取っていたのだろうか。(……もしかして妄想中によだれ垂れてた?)

しかし口元を拭っても、わずかに伸び始めたひげがジヨリツと不快な痛みをもたらすだけだった。

3

何度考え直しても、一日にオムツを三枚使うというのは金銭的に厳しかった。家にいる時間はずっとトイレに座って本を読み、そのまま垂れ流すようにしてみただけれど、今度は耐えがたいほどの腰痛に悩まされてしまった。

普段より重く感じる体を引きずり、今にも降り出しそうな湿気に包まれながらドラッグストアに向かう。今日は創業記念だからなんだかで、全品十五パーセントも安く買えるのだ。オムツは先日買ったばかりだけれど、安いうちに買っておきたい。

店内は目がチカチカするほど明るかった。そしてもう夜だというのに——いや、夜だからこそスーツを着た男女がレジの前で列を作っていた。

(混んでる……)

今、日本は貧乏だという。給料は上がらないのに物価や税金ばかりが上がっていく。だからみんなこうして安い時に買い物をするのだろう。本当は今すぐ家に帰って疲れた体を休めたいと思いつつながら。

斗真は足早にオムツコーナーに向かうと、いつものバックを手を取った。レジには斗真の前に四人の男女が並んでいる。

首を伸ばし、店員の顔を見る。三つあるレジのうち顔が見えたのは二つだけだったが、どちらもクーポンをくれた男性ではない。顔が見えないもう一人は、後ろ姿から女性だとわかった。

(残念……)

会えたらいいなと思っていた。クーポンをもらったことは内緒だから大きな声でお礼を言うことはできないけれど、先日はありがとうございましたと言うくらいなら許されるだろうと思っていたし、あの穏やかで落ち着いた声をまた聞きたいとも思っていた。

背後を振り返り、店内を見回す。けれど見えるのは客の姿ばかりで、目当ての顔を見つけることはできなかった。

(今日は休みなのかな……)

客が一人会計を終えた。前に詰める。すると斗真が並

んでいたレジの店員が突然こちらを向いた。若い男の子だ。一瞬目が合ったような気がする。店員は慌てた様子でエプロンの紐を握り、小さな機械に話しかけた。

万引きをしたとでも勘違いされたのだろうか。でもそんなことはしていないし、オムツはちゃんと手に持っている。監視カメラを確認してもらえば他の商品には触れてさえないことを理解してもらえるだろう。そう思いながら、もし信じてもらえなかったら……と不安になり、心臓がスピードを上げていく。

(あ……)

なんて説明しようかと考えていた時、男性が一人、小走りで姿を現した。先日クーポンをくれた男性だった。その人が、斗真の並ぶレジに入った。どうやら単に手伝いを呼んだだけだったようだ。二人がかりになったことで会計のスピードがグンと上がる。

(うそ、どうしよう、えっと……)

頭の中でお礼の言葉を考えているうちに、斗真の順番が来てしまった。

レジの手に若い店員がおり、その奥、会計機の方に先日の男性が立っている。

オムツのバックを台に置き、足早に先へ進む。男性は柔らかな笑顔を見せてくれた。

「いらっしやいませ」

「あのっ、先日はあの、その、」

うまくお礼を言えずにいるうちに、たった一つの商品はスキヤンを終えて台の端に着いてしまった。画面

に表示された金額を見て、慌てて財布からお金を出す。何度も頭の中で思い出していた声が言った。

「ポイントカードはお持ちでしょうか」

「あの、持ってなくて、その、」

それよりお札を言わなくちゃ、と思うのに言葉が出てこない。

「一ポイント一円でお使いいただけます。カードの発行は無料ですが、いかがでしょうか」

それなら欲しいなと思った。それにこの男性の声をもっと聞いていたい。

「欲し——」

しかし、会計待ちの客がたくさんいることを思い出す。ここで流れを止めてしまうわけにはいかない。

「あの、また今度、その」

「ではお作りしますね」

あ、と思った時には新品のカードがレジに通されていた。お釣りとレシート、カードと一緒にはがきサイズの紙を渡される。

「こちらの入会紙にお名前と住所と電話番号を書いてお持ちください」

「えっと、今——」

男性が壁の方を見た。

「あちらの台でご記入いただいてもかまいませんし、また後日お持ちいただいてもかまいません」

「あ……わかりました。ありがとうございます」

結局先日のお礼は言えなかった。でも男の人は優し

い笑顔で斗真を見送ってくれた。

(しゃべっちゃった……!)

店を一步出た後、急に胸が高鳴り始めた。何だか信じられない。普通に人と話げできた。いや、斗真はほとんど話せていないけれど、あんなふうに誰かに接してもらったのは先日クーポンをもらった時以来だった。

(まるで人間になったみたい……)

生まれた時から人間だったけれど、この五年、ずっとゴミ以下の扱いをされていた。だからまるで人間に生まれ変わったみたいで心が弾む。

(嬉しい……!)

一度そう思ったら喜びがどんどん増してきて、顔が勝手ににんまりと笑った。頬の緩みを感じるなんていったいいつぶりだろうか。とても気分がいい。

(帰ったらすぐに入会紙を書こう!)

住所と名前と電話番号と言っていた。丁寧に書いて、明日の仕事帰りに渡しに行こう。できればあの男の人に手渡ししたい。あまり混んでいなければ先日のお礼を言う時間くらいはもらえるかもしれない。

話すきっかけができた。頬の熱を感じながら、斗真は足取り軽く家路についた。

* * *

「あの子は天使か……」

今まさに考えていたとおりの言葉が聞こえ、入岡は

思わず振り返った。

「え？」

「——って、昨日顔に書いてありましたよ」

藤田が冷めた目で入岡を見ていた。

最近の子は空気だけでなく心まで読むのか。恐ろしい。人間より、小さな機械を相手にしている時間の方が長いというのに。

「店長、もしかして初恋ですか」

「はあ？」

呆れた顔を作ってはみたものの、もうバレていると認めなければならぬかもしれないと考える。

「めちやくちや初々しい反応してましたけど」

「初々しい？ 俺が？」

藤田が頷くのを見てほっとした。どうやらオムツに萌えていることも、あの子とのプレイを妄想していたこともバレてはいないようだ。

「でれでれしちやって……かわいい顔してると思えますけど、ガリガリじゃないですか」

「あれ、藤田くんってもしかして男いける人？」

「俺は女専門です。でも姉が腐女子なんですよ。BL大好き」

「へえ……」

反応に困る。だってどうやら、あの子を好きだということが藤田の中では決定事項になってしまっているよなのだ。

(好き、ではないんだよなあ……)

だつてまだ名前すら知らない。外見を知っていると、声を少し聞いたくらい。あとかわいいオムツのライン。オムツカバーはしているのだろうか。ピンクも水色も似合いそうだ。クリーム色もいいが、もう少し濡れたときに目立つ色合いの方が――

「ほんと、うまくやりましたよね」

「え？」

「カード。名前と住所と電話番号。知りたいから強引にレジ通したんでしょ」

「はあ？ いや、あれは欲しがってたでしょ。結局ポイントで値引きになるようなもんだし。しかもそんな個人情報、さすがに悪用できないよ」

ポイント還元の分の売上は落ちることになるが、「どうせならポイントが貯まるところで買おう」というのが人間の心理だ。

「はあく。さてはそれで、来店回数アップを狙ったつてわけですね」

「君の中で俺はいつたいたいという人間なの……」

まるで男にも金にもがめついみたいだ。

「二十近くも若い子に手を出そうとしている変態」

「……来月からシフト減らそうか」

じつとりと藤田を見ると、ははは……と頭を掻きながら笑われる。

「冗談ですよ」

「冗談に聞こえなかったけど」

「それより、もう俺休憩終わるんで。お疲れ様です」

「あっ！　こら！」

逃げるな、と言いかけてやめた。彼の休憩時間はたしかにあと二分しかない。藤田が売り場に戻らなければ、次の人が休憩に入れなくなってしまう。

平日の昼間。来客はそれほど多くないので、パート三人と薬剤師、それに藤田で回している。あのオムツの子は今頃仕事だろうし、それなら今のうちに事務仕事を片付けてしまい、夜は売り場で過ごしたい。

入岡はパソコンを開くと、来月のシフト表の確認を始めた。

(あ……)

きよろきよろと辺りを見回す男の子。まさに入岡の天使が、おそらくたぶん絶対入岡を探している。

(やばい、かわいい……)

しかし、今日はいつもほどオムツが膨らんでいないように見えた。替えたばかりなのだろうか——そう思った時、もしかしたら替えてくれる相手がいるのかもしれない、という考えにたどり着く。

(え、え、うそ?!　やばい……まったくそんなこと考えてなかった……)

彼自身が買いに来るのは相手による羞恥プレイ目的——もしそうだったら、どれほど泣いても藤田に絡んでも立ち直れない。

どうしよう。まだ名前さえ知らないのにふられるのだろうか——いやまだ好きになったわけではない、と

ぐるぐると考えていると、小さな声が聞こえた。視線を上げると、天使が入岡の方に小走りで寄ってくる。

「あの、こんばんは」

「——いらっしやいませ」

仕事前のスマイル。うまくできている自信はない。

だってこの子が他の男に足を開き、陰部を清めてもらっているのかもしれない、哺乳瓶を咥えさせられては「みゆく、んーま！」なんて甘えているのかもしれない——ということに気付いてしまった直後なのだ。

「あの……」

天使がきよろきよろと辺りを見回した。それから小さな声で「先日はありがとうございます」と言って頭を下げる。

(……やっぱり天使だ……)

相手がいようがいまいが——いや、いてはいけなが——天使であることにはかわりない。

「いえ、お気になさらず」

「その……とても助かりました。本当に」

「よかった。最近は値上がりが多いから……そうだ、カードの紙、読んだかな。あそこにあるアドレスに空メールを送ると、たまにクーポンが届くから」

つい、ため口を使ってしまった。慌てて言葉を遣い直す。

「よかったら登録してみてください」

入岡が笑顔を作ると、天使は顔をほころばせた。かわい。地上に降りて来てくれてありがとう。

「あ、読みました！ でもちよつとよくわからなくて、やってなかったんです」

「では、お教えしましょうか」

裏でやらねばならない仕事はすべて終わらせてある。昼間に頑張った自分を褒めながら、店の端に移動する。

天使が小さな手で携帯を出す。この親指をちゅぱちゅぱしているところが見たい。見たいけれど実際に見たら泣き出す前にミルクを作ってやらなければならぬ。飲ませる前には熱さの確認だって怠らない。いややっぱり「みゅくう〜！」と泣くところも見たい。

「えっと、メールですよね」

「はい。空メールなので、このアドレスを入力して送信していただければ」

ああ、どうしてここに自分のアドレスを書いておかなかったのだろう。そうしたら、天使が間違えて入岡の携帯に送ってくれたかもしれないのに。

「できました！ 送ります」

まるで連絡先の交換だ。しかし当然、ドキドキはしない。だって自分の携帯が鳴ることはない。つらい。

「あ、メールがきました」

「そこにあるリンクを開いてください。それでメルマガ登録は完了です。たまにクーポン以外のキャンペーンメールも来ちゃうので、それはマイページから受信の可否を選択してくださいね」

「わかりました。ありがとうございます。あ、あとこれ、書いてきました」

差し出されたカードの入会用紙。暗記してしまいたい気持ちをこらえ、ほとんど見ないようにして記入漏れの有無を確かめる。

(斗真くん……斗真、斗真……)

「はい、たしかに。ありがとうございます」

「あの、カードってもう使えるんですよね？」

「ポイントは昨日の分も入ってますよ。あ、レシートにポイント数が載ってるので見てみてください」

「わかりました。えつと……じゃあお店、見せてもらいます」

「ごゆっくり——あ、さっきの登録メールにクーポンがついてると思います。レジで見せてくださいね」

「え、斗真が鞆から携帯を取り出す。「ほんとだ！　ありがとうございます」

別に、入岡が発行したわけではない。けれどまるでそんな気分になるような笑顔。

レジで待っていていよう、と客もいないレジに立ち、不思議そうな顔をするパートに背を向けて仕事をしているふりをする。

(どこ見てるのかな……)

オムツは昨日買っていったから、ティッシュなどの日用品かもしれない。

(ティッシュ……)

つい、白濁に濡れたペニスを拭うところを想像してしまう。

(オムツをつけたままベッドにこすりつけてたら最

高……)

そんな姿を目撃したら、甘く優しく叱ってしまうだろう。いけない子だね、おちんちんに怪我がないか確認するよ、とオムツを外して――。

(おしっこお漏らししちゃうから外さないでえ……とか涙目で言われたらそれだけでイク……)

破壊力抜群だ。すでに鼻血が出そう。

妄想を楽しみながら待っている、斗真がレジにやってきた。嬉しそうな顔で、パートではなく入岡のレジに一直線。恋愛感情じゃない、と思っていた自分も消えた。好き。

斗真が持ってきたのは昨日も買ったはずのオムツだった。せっかくクーポンがあるから買っておこうと思っただろう。

「いらっしやいませ」

「へへ、これ、お願いします」

照れながら差し出されたカード。まるで子どもものつかいだ。かわいい。危ないから帰りは家までこっそり見守ろうか。

「お預かりします」

カードを通し、金額を告げる。お釣りを渡した直後、携帯の呼び出し音が鳴った。入岡のものではない。

誰からだろう――嫉妬心に燃えていると、対応した斗真の携帯から大きな声が聞こえてきた。

『ト……マ！』

「ひっ……」

斗真、と言ったのか。男に下の名前で呼ばせているのか。しかし斗真の目が揺れ動いていることに気付く。

『お前……てんだよ!』

「えっ?」

『……会社の……から……』

声が割れてしまっている。聞き取りたいのに、耳を澄ませても理解できない。他の客に邪魔されぬよう、しれっとレジ休止中の札を出す。

「え、あの、その担当は僕じゃ……」

『……!……!』

「あっ……」

不快な声が聞こえなくなった。斗真が携帯を鞆にしまう。しかしその顔は蒼白で怯えてきつっていた。

「……大丈夫ですか?」

「あ……あ、すみませ……」

わずかだが声が震えていた。

「今の、職場ですか」

「あ……あ、はい……なんか職場の人がミスしちゃったみたいで、呼ばれちゃって……」

あんな話し方をするような男がいるところになんて行かなくていい、と言いたかった。しかし今の様子だと、すぐに向かわなければならぬだろう。だがオムツを持っては行けないはずだ。

「ではこれ、お預かりしておきましょうか」

「え……?」

「すぐに行かないとまずいんでしょう? お会計済

みって書いて、レジに置いておきます」

「でもご迷惑じゃー」

「かまいませんよ」

「すみません……じゃああの、」

斗真が時計を確認した。つられるように入岡もレジの時刻表示を見る。二十一時過ぎ。

「すみません、今日は厳しいかもしれません。明日でもいいですか？」

「いつでも——あ、でもこれに名前と電話番号をお願いしてもいいですか」

エプロンのポケットから裏紙で作ったメモ帳とペンを取り出す。斗真は震える手でそれを握った。

「……大丈夫？」

「え？」

「震えてる。怖い？」

つい、仕事を忘れてしまった。抱きしめて安心を与えてやりたくなる。

「あ……いえ、大丈夫です。これ、すみません、よろしくお願いします」

斗真は頭を下げると、足早に店を出て行った。

(オモライ……)

片仮名で書かれた名字。そして携帯の電話番号。さっきは名前に気を取られていたので「斗真」しか確認できなかったが、これでフルネームがわかった。

(お漏らしみたい……名字までかわいい……)

けれどさっきの電話と斗真の怯え方が気になった。

「オモライ様お預かり。会計済」と書いたメモを貼った
オムツをレジ下にしまうと、入岡は複雑な気持ちで売
り場に戻った。

* * *

(…あれ?)

真っ暗な室内。明かりをつけても誰一人おらず、自分
の席を見ても先ほど電話で言われた会社関連のものは
何一つなかった。

携帯を取り出し、恐怖故ゆえの吐き気に耐えながら先輩
の携帯を鳴らす。

(出ない…何、どういうこと?)

嘘だったのだろうか。しかしこれまでにそんな嫌が
らせをされたことはない。むしろ先輩は退職後にまで
当真と関わりを持ちたいとは思っていないだろう。

キャビネットから該当の会社のファイルを取り出す。
とにかく来いと言われただけだったし担当している会
社ではないので詳細はわからないが、ファイリングさ
れた最新の書類を見ても特に問題は見当たらなかった。
(もしかしたら酔ってただけだったのかも)

きつとそうだ。電話に出ないのも、みんな飲んで盛
り上がっているからだろう。

ファイルをキャビネットに戻して足早に会社を出る。
今ならまだ、ドラッグストアの閉店時間に間に合うだ
ろう。

もう一度あの優しい男の人に会える——そう思うだけで胸が高鳴った。心臓が、先輩からの電話を受けた時とは真逆の緊張感でドクンドクンと激しく鳴り始める。

(大丈夫？ って、すごく優しい言い方だった……)

でもあれはきっと単に電話の音が漏れていたからだ。突然怒鳴られたから気にかけてくれただけ。

(そうだ……)

あの人に、怒鳴られるようなやつだと知られてしまった。しかも会社の人がミスをしたらしいなんて、人のせいにするようなことまで言ってしまった。実際に担当は自分ではないのだから言い訳ではないけれど、事情を知らないあの人にそうと判断してもらうことはできない。

(どうしよう……)

今は少し、顔を合わせにくい。でもオムツを預かってもらっている。口先だけかもしれないけれど心配もしてくれていた。

(とりあえず戻ろう……)

小走りでドラッグストアに向かう。

(営業時間はたしか二十一時半まで……)

腕時計は暗くて見えない。でもたぶん、あと五分くらいだ。

一歩進む度に荒れたペニスがおムツにこすれて痛む。けれど今日のうちに受け取ってしまいたい。

(迷惑、かけたくないし……)

信号で止まり、膝に手をつけて全身で息を吸う。完全

に運動不足だ。不快な汗が背中に滲む。

(でもあと少し)

この信号を渡ってまっすぐ行けば次の交差点の手前、左手側に店がある。そちらの信号を渡る必要はないので、ここさえ過ぎてしまえばすぐに着く。なんとか間に合いそうだ。会計も済ませているので営業時間を延長させてしまうこともない。

(よかった……)

信号が青に変わった。左右を確認し、横断歩道を渡る。遅い時間だというのに車が多い。明日は土曜日。今から出掛けるのだろうか。それとも残業を終えて帰るところなのか。

ようやく看板が見えてきた。まだ明かりがついている。店内を見ると、遠くからでもぼんやりと客の姿を確認できた。

(間に合った……)

まだあの人はいるだろうか。それとも店内にはおらず、裏に入ってしまっただろうか。できればあの男の人から受け取りたい。

もし店内をざっと見ていないようだったら明日にしておもうか。そんなずるいことを考えていたからか、赤信号でも止まろうとしない車の存在に気付いたのは衝突音を聞いた瞬間だった。

くく略くく

「斗真くんはローション初めて？」

「えっ……、え、その、えっと……」

涙目。かわいすぎる。食べたい。襲いたい。オムツに顔をうずめたい。

「ごめん、赤ん坊にはまだ早かったね。これでお尻をぬるぬるにしてうんち出せるように頑張ろうね」

「アッ」

言いながら指を動かすと、斗真がきゅつと眉根を寄せた。性感だ。斗真は今、入岡にアナルを撫でられて感じている。

しかし斗真のペニスは勃起しない。

「少しだけ指を入れるよ」

「あ、だめっ……」

「大丈夫」

撫でまわしていたので、アナルは柔らかくなっていた。そこにそつと中指を入れる。

「あっ」

「痛い？」

「いえ……」

「吸い付いてくる……ここに指を入れられるのは初めて？」

無意識に独占欲が顔を出す。頷かれた瞬間には、ほつとして体から力が抜けた。

「そう、よかったー！ごめん、床が痛いかな？ ベッドに行こうか」

「いえ、あの……」

斗真がはあはあと口で呼吸をし始めた。アナルもひくつきが増している。

「出そう？」

斗真がちらりと入岡を見た。視線がぶつかった瞬間に逸らされて、けれどその恥ずかしそうな表情で言わんとしていることを悟る。

「お腹に力を入れてごらん」

「でもっ」

まだ指が入ったままだと言いたいのだろう。

「お尻、切れないようにもう少し指で広げておくから。」

うんちが下りてきたらちゃんと抜くから大丈夫」

「やっ！」斗真が首を振る。

「汚くないよ。斗真くんのうんちのお世話をしたい」

排便の手伝いをしてやれることが幸せだった。少しでも出しやすくなるよう指を動かしてそこを広げる。

「あ、あっ、はあっ……やあっ」

「お尻、広げられると便意が強くなるでしょ。でも思いつきり力を入れると切れちゃうからね」

斗真が頷く。「んっ」

素直だ。それほど便意が強くなってきたのだから。

「ゆっくりね。うんちが下りてくるのを意識して」

左腕を斗真の背中の下に差し込み、軽く上体を起こしてやる。

斗真は素直に入岡の首に腕を回した。すがるように抱きつかれ、カウパーが下着に滲む。

「あつ……や、あ、はあつ……」

「うん。上手だよ」

入岡の指に便が当たっている。硬い。もう指を抜いてやらないと苦しいだろうか——でもあと少しだけ、と心の中で決めて指を動かす。

「あ、はあつ、あ、あつ……」

「ゆっくり息を吐いて」

斗真が苦しそうに喘ぎながら、それでも細く息を吐いた。ふーふー、という健気な音が愛らしい。

「上手だね、いい子。ほら、指を抜くよ。うんちが出てくるね……」

「やあつ！ ああつ、あ、あつ……」

入っていたのは第一関節までだった。それでも存在感が大きかったのだろう。斗真はぎゅうぎゅうと入岡に抱きつき、息を詰めた。

「んっ——」

くく略くく

ここに来ると、どうしてもクビのことを考えずにはいられなくなってしまう。

(どっちかがクビ……)

中堂か、斗真か。残りはあと一週間。

みんなのデスクを拭き終えたとき、ドアノブを下ろす音が聞こえた、驚きに体が跳ね、折るような気持ちでそこを見つめる。

「あ、おはようございます」

「お……おはようございます……」

朝の八時。まさか中堂と一時間近く二人きりなんて。
(なんで早く来たんだろう……)

こんな時間に来るのは斗真ぐらいで、みんな出勤するのは始業時間の五分前くらいなのに。昨日までは中堂もみんなと同じような時間だったのに。

「面来さん、こんな早くに来てるんですね」

「……仕事がたくさんあるので……」

逃げるように部屋の奥にある簡易キッチンに向かう。中堂がついて来るのがわかったが、怖くて振り返ることはできなかった。気付いていないふりをしてケトルに水を入れる。

声は、思ったよりも近くから聞こえた。

「まだオムツ濡れてないんですね」

「え——」

振り返りかけてやめる。しかしどうしてわかるのだろう。それにどうしてそんなことを訊けるのだろう。自分だったらオムツを使っていることでさえ何か事情があるのかもと思って触れずにおくのに。

「濡れたら教えてください」

「……あの、そういうのやめてください」

今までは騒ぎを起こさないようにとそればかり考えていたけれど、今は中堂と二人だけだしかわまないだろう。それに今日は木曜日。週明けの月曜にはどちらかのクビが決まるのだ。

覚悟を決め、強めの声できっぱりと言いつつ。

「もう言わないでください」

「どうしてですか」

「え……どうして……」

思わず振り返ってしまった。真剣な視線とぶつかる。

「俺は面来さんのオムツが好きです。興奮する」

中堂が二歩、斗真に近づいた。近すぎる。距離をとりたいのに、後ろにはシンクがあつて動けない。横にずれようと視線を走らせると、中堂は斗真を部屋の隅に追い込むように半歩シンク側に体を寄せた。

「や、あの——」

どうしよう。逃げ場がない。先日は偶然先輩がトイレに来たから助かったけれど、どう考えてもこの時間に入社してくる人はない。

「触っていいですか」

「え——」

「オムツしてるってバレバレの格好して、本当はそういうふうにされたかったんでしょ」

「何言ってるんですか……」

怖い。こんなの普通じゃない。中堂には悪びれた様子がないのだ。自分は少しも間違っていないと思ってるのが伝わってくる。

「ちんこは赤ん坊みたいなのかな。皮、むけてます？
精通はしてますか？」

「なっ……」

なんてことを訊くのだろう。同性同士の冗談として

許される範疇を超えている。

「むいてあげましょうか。強引にはしないし、舐めて濡らしながら優しくしてあげますよ」

「やつ……」

早くここから逃げないと。でも横をすり抜けようにも、一步でも中堂に近づけばこちらが求めていると勘違いされそうな危うさがあった。

「精通がまだならちんこしごいてあげますね。初めて射精するならおしっこが出るような感じがして怖いかもしれないけど、漏らしてもかまいませんから」

「あの、僕今日は帰ります」

どうセクビになるのだ。一日くらい休んだってかまわないだろう。これまでは熱があつたつて出勤していたのだ。

「じゃあ俺の家にきますか」

「……は？」

「帰るんでしょう？ 俺は別に仕事がしたくてここに入ったわけじゃないから別にいいんですよ」

「中堂さん……？」

理解できない。常軌を逸している。話がまったく通じていない。いったいどうしてこの人と自分のクビを天秤にかけていたのだろう。辞めるべきはこの人の方だ。

「ちんこ、舐められたことありますか？ あ、でもお漏らししちゃうから口におしっこ出ちゃうかな。でもかまいませんよ。飲んであげます」

「なに……言ってるんですか……」

怖すぎる。しかし中堂はまた一步斗真に近づいた。

「さあ、帰りましょう。また邪魔が入ったら嫌だし」

邪魔——おそらく先輩のことを言っているのだろう。

手首を握られ、慌てて振りほどく。

「やめてくださいっ！」

「どうして？」

「は？」

理解できない——そんな思いが顔に出ていたのか、中堂の雰囲気ガラリと変わった。怒りによってこめかみの血管が浮いて見える。

「小便を漏らすだめちゃんこの世話をしよあげると言ってるんですよ」

「求めてませんっ！」

タックルをするように腰を落として脇をすり抜ける。そのまま逃げようと思ったのに、廊下に出る直前に追いつかれて腕を掴まれた。

「やっ……！！ 放してっ！」

「どこ行くんですか」

「放してくださいっ！」

おそらく八時半は回ったはずだ。それなら他のフロアに行けば誰かしらはいらるだろう。

「うわっ！」

しかし腕を引かれ、床に押し倒された。力強い腕に両手をひとまとまりに固定され、上半身はまったく動きがとれなくなってしまう。せめて足をばたつかせようと思ったけれど、両太ももを挟むようにして上に乗

られたせいでそれすらもできなかつた。

「やめっ……！ 放してっ！」

「おとなしくしないと人が来ちゃいますよ。オムツ姿、みんなに見られてもいいんですか」

どうせもう知られている。知られるだけと実際に見られるのは全然違うけれど、もう辞めるのだ。気持ちちは固まった。中堂がクビになつたとしても、もう怖くてここには来られない。

「放して——ひっ」

中堂が膝を陰部の上に置いた。体重をかけられ、そこを潰される恐怖に動けなくなる。

「静かに」

声を出せず、ただコクコクと頷く。

くく略くく

膝を唇で食み、痕が残らない程度に吸う。それを繰り返しながら足の付け根に進んでいくと、今度は頬にオムツが触れた。

「入岡さんっ！ 入岡さんっ！」

隙間を作るようにオムツを軽く引っ張り、そこに舌を差し入れて鼠蹊部を舐める。

「ひあああっ！」

今お漏らしをしてくれないだろうか。「えっちなことをしている最中におしっこが出ちゃったね」といじめ

たい。

「ああっ！」

反対側の鼠蹊部を舐め、おそらく次こそ直接……と期待しているだろう斗真の顔を、上体を起こして眺める。

「あ、や、なんで……」

「かわいい……すっごい興奮する」

「入岡さん……」

「オムツ、外してみようか」

「あ……でもちーが……」

「斗真くんは赤ん坊だからお漏らししてもいいって言ったでしょ」

「でも……」

「じゃあおしっこが漏れてもいいように、うんちするところに切り込みを入れてセックスする？」

「あ……」

「俺はどっちでもいいよ？」

それ専用のオムツがある。もちろん斗真には用意があることさえ伝えていなかったけれど。

まあまだ早いだろう……そう思ったのに斗真は目をつぶったまま頷いた。

「うん……」

「え？」

「オムツ、つけたままがいい……」

「……いいの？」

つい期待が声にのってしまった。しかし斗真は入岡

を蔑む目で見ることなく頷く。

「僕、ちーお漏らししちゃうから、お布団汚さないようにして」

「ああ……」

もう出そう。斗真にお漏らしお漏らし言っている場合ではない。

クローゼットに走り、セックス用のオムツを取り出す。ピンクがいいかクリーム色がいいか水色がいいか……三色を斗真に向けてとピンクと答えられた。

(ピンク選ぶなんてえっち……)

明るいライトの下でまだ濡れていないオムツを剥がす。斗真のペニスに緩く起ち上がっていた。完全な勃起ではない。けれど角度を変えているのを見るのは初めてだった。

セックス用のオムツにあて直すと、興奮は最高潮になった。

「すぐよく似合うよ」

「これ、お漏らし……」

「大丈夫。なんでもたくさん出していいから」

早く入れたい。けれどまだアナルを慣らすことさえしていない。

手のひらでオムツを撫でながら切り込みを探す。手早く見つけたそこに指を差し入れると、斗真がかわいい声を出した。

「あっ……」

「大丈夫」

場所の確認を終えたらローション入りの使い捨てシリンジをそこにそっと挿入する。オムツを替える時にしてしまえばよかった。けれどオムツをしているのにアナルをいじる――その光景にめまいがするほど興奮する。

「あっ、うんちっ」

「うんち出る？ いいよ？」

お尻をいじられると便意を催すなんて――排便の時にちゃんと世話をしてやったからだ。最高。たった一度きりだけだ。

「やだっ」

「ぼんぼん痛くなるからうんちしちやおうね」

シリンジを抜くと、斗真がぐずるように足をばたつかせた。

「うんちないっ」

「うんちないの？」

確認するべく指を入れてみる。すでにローションで濡れたそこには、たしかに何もなかった。

「ああ、お尻にものを入れられるとうんちって感じがするんだね。もしかしたら今からずっとうんちしたってなっちゃうかもしれないけど、頑張れるかな？」

「うんち……」

斗真が涙目で入岡を見上げた。指を入れているだけでこんなふうになるなんて。

「かわいい。えっちが終わったらたくさんうんちしようね」

「うん……」

もう一度シリンジを差し入れて腸内をローションで満たす。キスを交わしながら指をクニクニと動かすとそこは次第に柔らかくなった。

「うんちするところ痛くない？」

「ない……」

「おちんちん苦しくない？」

「ない……」

「じゃあおちんちんが苦しくなったら教えてね」

手早く自身の勃起にコンドームを被せる。オムツの切り込みからペニスを差し込むと、まだ斗真の体内には入っていないというのに満たされたような気分になった。

「斗真くん……まだ赤ん坊なのにこんなことしてごめんね」

自分の発言にゾクゾクする。もちろん斗真は大人だ。わかっているのに——わかっているからこそ興奮する。

半ば手探りで腰を進めると、柔らかなところが入岡のペニスの先端を受け入れた。

「ああっ」

「痛い？」

「……うんち」

「かわいい。うんちじゃないよ。もうちょっと入れさせてね」

「ん……」

斗真の唇を塞ぎ、舌を絡めながら腰を押し込む。口内

もお尻の中も熱い。斗真が興奮してくれていることがわかる。

「おちんちん苦しいかな」

「ちよつと……」

「じゃあおちんちんで一緒に気持ちよくなれるようにしようか」

「え？」

オムツを外すつもりはなかった。やっぱり斗真にはオムツに射精してほしい。一度ペニスを引き抜いてうつぶせで寝かせる。

「あんよを伸ばして」

足ピンの床オナ状態。癖になれば斗真は自分の力では射精さえできなくなるだろう。

(でも別に、一生俺が世話をするんだし……)

身勝手な考えだという自覚はあった。けれどトイレだっていったんは教えるとはいえその後はまたオムツに戻させるし、食事も排泄も性的なことだってすべて入岡が世話をするのだ。斗真は何もできなくていい。できなくなってもほしい。

「うんちのところ、もう一度ね」

背中に覆い被さり、耳に唇をこすりつけながら伝える。そうしながらアナルに勃起を戻すと斗真の肩がきゅうつと狭まった。

「んっ……」

「ちよつと揺らすよ」

前後に軽く腰を振りながら挿入を進めていく。ペニ

スだけでなく乳首もこすれるからか、斗真は小さな声で喘いだ。

「ああっ」

「気持ちいい？」

「わかんないっ」

「あー…：もうほんとかわいい…：」

しばらくそうしていると、ペニスの半分ほどが中に埋まった。最後まで入れたいが、セックスはまだ初めて。それにオムツがあるのでそれほど刺激がなくなるとも入岡としてはじゅうぶんだった。

「斗真くん。入れさせてくれてありがとう」

「あ…：」

「斗真くんはまだ赤ん坊なのにお尻だけ大人になっちゃったね」

あえて斗真のペニスを潰すように体重をかけながら腰を揺らす。胸の下に両手を入れて乳首に触れると、斗真が高い声を上げた。

「ああっ！」

「敏感でかわいい。たくさんお漏らしして」

全16万2千字です。

よろしくお願いたします！

オムツ・甘やかし・排泄介助・仮性包茎・お漏らし・哺乳瓶・

溺愛・失禁・脅迫・トイレトレーニング・スカトロ

関連作品

大内医師・狭山看護師（大内クリニック）

キョウ※名前だけです（すれ違いオムツ生活）

富本※名前だけです（キス・イン・ザ・ダーク／商業）

セックス用オムツ等、入岡愛用品（商品開発部・育児グッズ課）

尊すぎる天使 サンプル

©goneone (うーわんわん)

2022/ 12/ 28

メール: goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @goneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。